

M A B

門 司 正 三 (植物)

ユネスコが行なっている IHD (国際水文学十年計画) や CSK (黒潮共同調査) などの国際共同研究に、1971 年から新しく、人間と生物圏 (Man and the Biosphere) 計画が加わることになった。この研究計画のめざすところは、人間活動による生物圏の変化と、その変化が人間に及ぼす影響を明らかにし、評価することにある。MAB に先立って行なわれた ICSU (国際学術連合会議) の主宰する IBP (国際生物学事業計画 1965~1974) では主として自然の生態系の構造、機能および動態を問題としてきたが、MAB では、人間によって変化させられた、あるいは管理された生態系に重点をおいて研究を進め、自然と社会経済とのかかわりあいを明らかにす。

これらの環境問題が、人口や食糧問題として 1955 年頃から次第に、世界的に重要視されてきたが、1960 年頃からは環境破壊や汚染の問題としてとりあげられ、1972 年 6 月の国連環境会議の開催となったのは、しられているとおりである。IBP は食糧問題のバックグラウンドとしての世界の生物群集の生産力に重点をおいた研究であったが、それ以後の環境問題の研究体制としては、科学者レベルでは 1970 年 ICSU に環境問題科学委員会 (SCOPE-Scientific Committee on Problems of the Environment) が作られ、環境問題に関する情報の収集や助言の機関として活動している。これに対応する政府間の共同研究実施機構として、ユネスコの MAB が 1968 年の UNESCO Biosphere Conference 直後に計画され、1971 年の第 16 回ユネスコ総会で満場一致で承認された。直ちに、事務局で用意された 31 のテーマについて各国の意見がきかれ、同年 11 月の第 1 回調整理事会 (理事国はユネスコ総会で選出、25 カ国) で、以下の 13 のプロジェクトに集約された。

1. 熱帯および亜熱帯生態系に及ぼす、増大しつつある人間活動の生態学的影響
2. 温帯および地中海森林景観に及ぼす各種の土地利用および管理法の生態的影響
3. 放牧地——サバナ、草原 (温帯地域から乾燥地域まで)、ツンドラ——に及ぼす人間活動におよび土地利用法の影響
4. 乾燥および半乾燥地帯生態系の動態に及ぼす人間活動の影響——特に灌漑の影響について
5. 湖沼、河川、デルタ、河口、海岸地域の価値およ

び資源に及ぼす人間活動の生態学的影響

6. 山地生態系に及ぼす人間活動の影響
7. 島の生態系の生態学と合理的利用
8. 自然地域とそれに含まれる遺伝物質の保全
9. 陸上および水中生態系における害虫・雑草管理と施肥の生態学的評価
10. 主要土木工事が人間とその環境に及ぼす影響
11. 都市および工業システムにおけるエネルギー利用の生態学的諸問題
12. 環境の変形と遺伝学および人口学的変化との相互関係
13. 環境の質に関する認知

これらのプロジェクトに対する参加各国の計画をきくとともに、さらに詳細な実施計画の検討のために各プロジェクトに対して専門家会議 (panel of experts) を持つことになった。また、このほかに非常に広範囲にわたる環境教育活動と専門家養成・技術者訓練の問題解決 (特に開発途上国での) のための専門家会議と、全体の研究体制をとりまとめるためのシステムズアナリシスの専門家会議がもたれることになった。汚染問題については、その翌年春の国連環境会議まちであった。

第 2 回 MAB 調整理事会がこの 4 月 9~19 日、パリーのユネスコ本部で開かれ、理事国 (日本、中国、フィリピン等) からの代表のほか、UN の組織から FAO, WHO, WMO などの代表が出席し、非政府機関として ICSU, IUCN (国際自然保護連合) などの代表者も出席、約 100 名が参加した。会長には第 1 回に引き続きフランスの Bourlière が選ばれた。

この理事会では 13 のプロジェクトに対する各国の計画や、プロジェクト 1, 3, 5, 6, 12, 13, および教育、システムズアナリシスの専門家会議の報告の検討、さらに今まで得られている知見を総合して具体的な実施にうつるためのワーキンググループの編成、人文・社会科学との学際協力を行なう具体案、研究方法の統一、国際協力、地域協力の方法など多くの協議がなされた。さらに参加各国の研究計画をまとめて国際協力体制を確立するため、来年の 8 月下旬ワシントン D. C. で第 3 回調整理事会を開くことになった。本理事会では、第 1 回の時に問題にされなかった pollution の問題が大きくとりあげられた。これが国連環境会議等による認識の深まりによ

るのであればよいが、2カ年の間に実際の pollution がひどく進んだのであれば大変なことだという気がした。

会議が終ったのは marronnier のつぼみがやっとほころぶ頃であり、Jardin des Plantes のサクラ (関山) は花が散りそめる頃であった。パリの街も周辺に高いビ

ルが数多く建ちつつあるが、これと、地下鉄の中の人々がガムをしきりと噛んでいるのと妙に符合して、なんだか環境の急激な変化に対するヒトの適応手段の1つのように思えた。